描き文字の黄金期

一九二〇年代後半

▲一九二五年から二八年、ちょうど大正末期から昭和初期にかけて、描き文字集が一気に刊行されます。おもな描き文字集を列挙するとこうなります。

○和田斐太『装飾文字』太洋社装飾研究所、一九二五年七月
○藤原太一『図案化せる実用文字』太鐙閣、一九二五年十二月
○本松呉浪編著『現代広告字体撰集』誠進堂、一九二六年二月／一九二八年二月訂正増補版
○矢嶋週一『図案文字大観』彰文館書店、一九二六年三月
○藤原太一『絵を配した図案文字』太鐙閣、一九二六年六月
○野沢秀雄『文字と画の図案化資料』大東書院、一九二六年八月
○井関経営研究所編『広告文字書体大観』実業界社、一九二六年
○東京職業研究会編集部編『看板ポスター広告用　現代的な面白い文字の手本』東京職業研究会、一九二七年三月
○清水音羽『包装図案と意匠文字』江月書院出版部、一九二七年九月
○十時柳江編著『その儘使へる繪と図案文字』弘文社、一九二七年九月
○矢島周一『図案文字の解剖』彰文館書店、一九二八年四月
○室田久良三・富田森三『広告カットと文字集』誠進堂、一九二八年四月

四年間で十二冊、単純計算で四カ月に一冊ずつ出版されるという特異な状況です。ほかに一九二六年三月から同年末まで、雑誌『広告界』で室田庫久良三（本名＝庫造）の連載「広告用文字新書体の研究」（後に「商飾字体の研究」と改題）もはじまっていますから、まさに描き文字の黄金期といってもいいでしょう。

ここでは描き文字集をみながら、描き手の特徴や発想、問題点などについて具体的に論じていきたいと思います。

＊

▲まず一九二五年に大阪で刊行された和田斐太（あやた）の『装飾文字』★図八です。さきほど、「書く／描く」の節で紹介した下村正太郎が序文を寄せた描き文字集です。和田斐太の経歴はよくわからないんですが、もともと大丸の社員で店内の文字を描いていたようで、退職後に、この描き文字集を刊行したようです。

●さっきの稲場小千から、いきなりここへ飛ぶというのもすごいね。

▲この間にもいろんな動きがあったと思いますよ。ただ描き文字の流れを俯瞰するということは、日本で発行された書物や広告をすべて見ていくのと等しい膨大な作業でして。実際、思いつくだけでも、クラブ化粧品、レート化粧品、ヘチマコロン、資生堂、プラトン社の『女性』や『苦楽』、洋画封切館「松竹座」……いろいろありますけど。まあ、ここでは描き文字の黄金期のおおまかな姿をつかむということでご容赦を。

●ここに収録されている描き文字は、この本のために描いたものなの？

▲ほとんどそうだと思います。ただ、実際に使ったなと思えるものも、数点含まれていますけど。

■ずいぶん定形化されてきていますね。この後に出版される描き文字集にも同じようなスタイルがでてきますよね。

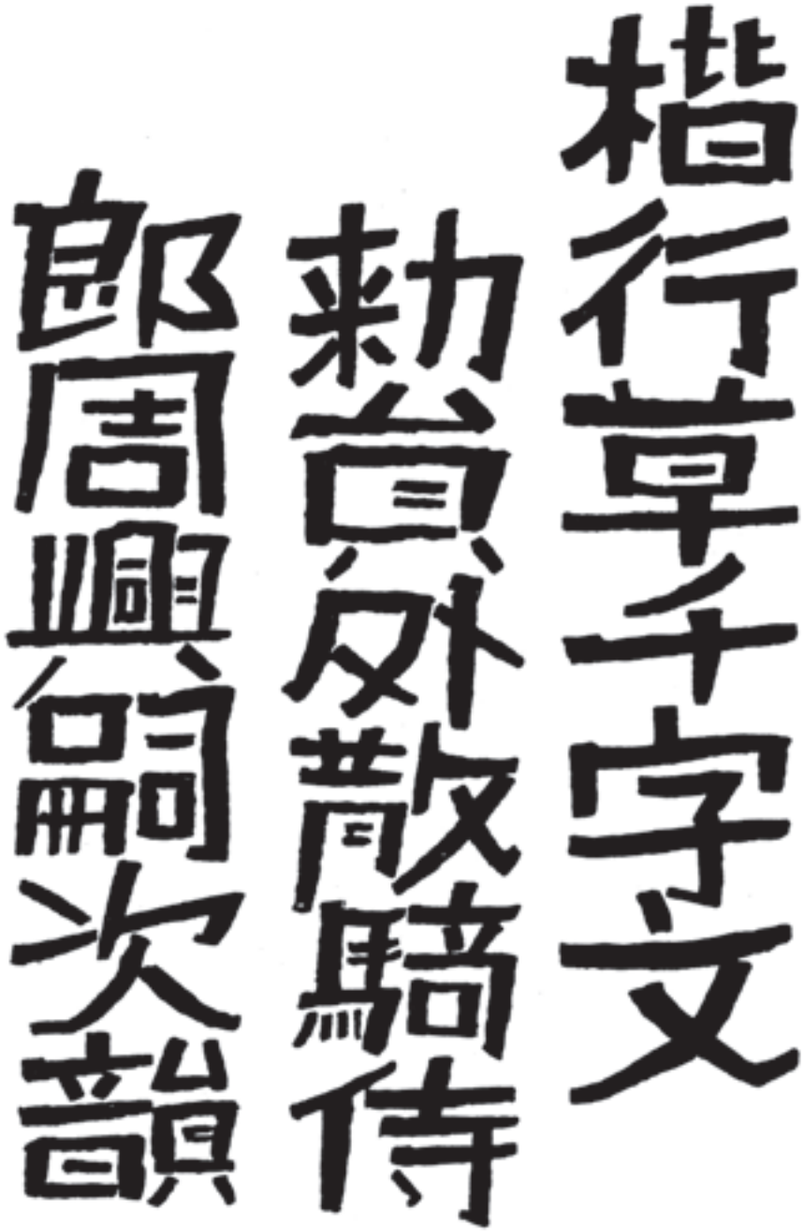
●まあ、手慣れているよ。完成されちゃってるじゃない。スタイルが同じ、エレメントが同じ、似たようなことばっかりやっている……ひとつのスタイルとしては完成してるね。以後のデパート系の描き文字には、この人の影響があるのかもしれないね。

▲ドイツ表現主義の影響がありますよね。特徴としては、どこまで省略できるかを模索しているって感じですね。

●全然関係のないことかもしれないけど、切り文字や版画などを意識するとすごく描きやすいんだ。ぼくの経験では、反転すると描きやすい。ベタを敷いておいて、白で描くとか。こういうのだってボディはあるんだよね、なければ描けないわけだし。

★図八－一…和田斐太『装飾文字』（太洋社装飾研究所、一九二五年）より

★図八－三



★図八－二…和田斐太『装飾文字』（太洋社装飾研究所、一九二五年）より

★図八－二…和田斐太『装飾文字』（太洋社装飾研究所、一九二五年）より

■これを見ると、たしかにありますね。さっき川畑さんがいったとおり、全体の傾向としては省略をうまく使ってますね。

▲この人はとくにその傾向が強いと思いますね。日本の図案教育で用いられる〝便化〟というか……。

■その〝便化〟というのがよく判らないんだ。言葉の感じからすると省略化、定型化かなという察しはつくけど。

▲平野さんの世代は学校で習いましたよね。

●大学の入試問題にも出ましたよ。果物がならんでいます、これを便化しなさい、便化でスケッチしなさい。デッサンのようにリアルに描くんじゃなくて、図案的に単純化して描いていく……。

▲省略、単純化しつつかたちを整える。「便宜的転化」の略といわれてますね。

■いつぐらいから使われたのですか？

▲基本的には文様史で使われてきた用語ですよね。たしか、明治から大正初期に活躍した図案教育者・小室信蔵[☆註六]の著書『一般図案法』（丸善、一九〇九年）にもでてたと思うから、日本の図案教育の根幹となった概念といってもいいでしょう。一九六〇年代末ぐらいまでは大学のデザイン教育でも採用していたはずですよ。

●歌舞伎の舞台の背景画とか、能舞台の鏡板の松、単純化された梅の花や雲の描き方……みんな便化です。

■そうすると、いわゆる文様史の流れが文字のデザインにも入っていた。それとこの描き文字のデザイナーというか、描き手との関係は？

▲まだこの頃だと、現場のたたき上げの方がおおいですね。一九三〇年代になると、河野鷹思さんのように、図案教育の最高学府・東京美術学校（現・東京藝術大学）を卒業して、第一線で活躍する人もでてくるけど。

描き文字を専門教育として本格的に教えようとしたのは、一九三〇年代後半くらいからですよね。詳しくはわからないんですが、日本美術学校で古田達賛[☆註七]らが……。

☆註六…小室信蔵（一八七〇～一九二二）明治・大正期の図案教育者。秋田県生まれ。一八九七年、東京・蔵前の東京高等工業学校工業教員養成所工業図案科に第一期生として入学、一九〇〇年卒。同校の助教授を経て、一九〇八年から、愛知県立工業学校教諭および名古屋高等工業学校講師を務めた。おもに執筆活動で、揺籃期の日本図案界に貢献した教育者。主著に『一般図案法』（丸善、一九〇九年）、『図案の意匠資料』（丸善、一九二一年）などがある。

☆註七…古田達賛（立次）（一八八五～没年不詳）デザイナー。岡山県生まれ。一九〇八年、東京美術学校図案科卒。白木屋呉服店図案部、日本紙器意匠部、岡山商品陳列所などを経て、一九二六年に「古田アルデバラン図案社」を設立。また同年結成された商業美術家協会に参加し、濱田増治とともに同協会の中心的な役割を果たした。

古田は描き文字に関しても積極的に発言、主な論文に「本邦在来の書体より最近の新書体迄」（『実用図案文字集』現代商業美術全集第十五巻、アルス、一九三〇年）、「文字図案法」（『平面図案法』図案新技法講座三、アトリエ社、一九三二年）などがある。なお日本美術学校での活動については、同校教授の肩書きで参加した一九三六年の座談会で、こう発言している。

「私共の学校（日本美術学校）では来年から文字を書く科といふのを特別に設けて、生徒に文字の研究をさせて行くことになつてゐます。日本にも自分の個性を少しも加へないで、此方の意志通りに忠実に描くことの出来る技術者（ドラフト）を養成したいですね」（座談会「図案印刷の諸問題」、『印刷と広告』第三巻第六号、一九三六年七月）。

●ひんしゅく買っただろうなあ。

▲いやいや、そうでもないと思いますよ。

ちょっとわき道にそれますけど、実業学校・商業学校では、すでに描き文字教育が実践されていたんですよ。当時の生徒たちの大半は大学に行かないで、卒業すると地元の商店に就職する。するとウインドー・ディスプレイやちょっとしたポップぐらい描けないと……ということになる。そこで実業学校・商業学校の「商業美術」の授業では、デザインや描き文字を教えたんです。

これが一九三〇年代に使われていた「商業美術」の教科書です。濱田増治の『商業美術教本』[★図九]（富山房）で、一九三四年版では上巻十七項「西洋文字の描き方」、上巻十八項「日本文字の描き方」で、それぞれ欧文レタリングと描き文字を教えていますね。一九三六年版だと入門用八項「文字の適合」で描き文字を、入門用十九項「文字の図案」で欧文レタリングを、という具合です。

■まさにレタリング教育だね、これは。

●すごいね、ここまで教えてくれりゃね。学生時代、佐藤敬之輔先生はここまで教えてくれなかったね。似たのはあったけど（笑）。

■どこに行っても申し訳ないと、亡師になりかわってあやまってます（笑）。

★図九
右上「西洋文字の描き方」
右下「日本文字の描き方」
（以上二点『商業美術教本』一九三四年版上巻より）
左上「文字の適合」
左下「文字の図案」
（以上二点『商業美術教本』一九三六年版入門用より）

＊

▲さて、つぎの藤原太一[図一〇]の『図案化せる実用文字』（一九二五年）に移りましょう。

一九二〇年代半ば以降、描き文字を一頁にたくさん詰め込んだ描き文字集が数多く出版されるようになりますが、その定型を示したのがこの『図案化せる実用文字[図一一]』です。

藤原太一は、一九一八年に仁丹本舗の広告部に入社、二六年二月からはベルベット石、三一年七月からはカガシ化粧品（丸善商店化粧品部）で活躍した大阪のデザイナーですね。これからみていく『図案化せる実用文字[図一一]』のほかに、『絵を配した図案文字』（一九二六年）という描き文字集もあります。

藤原の特徴は、造形的な完成度に力点をおいた点です。自身が目指す方向性について、彼は『図案化せる実用文字』の序文にこう著わしています。

文字を図案する――これも一つの芸術であると云いたい。（中略）詩歌や絵画に於て、僅か一点の無駄な言葉、僅かひと筆の不要な線があってはならないように、其れは文字を図案する上に於ても全く同様のことである。

彼の方向性は〝ロゴタイプ派〟といってもいいでしょう。あとで紹介する矢島周一が描き文字を一揃えのフォントとして捉えた、いわば〝書体開発派〟ですから、ふたりは対照的な存在ですね。

★図一〇…藤原太一（大阪広告協会編『大阪広告人名鑑』大阪広告協会、一九三三年より）

★図一一－一…藤原太一『図案化せる実用文字』（太鐙閣、一九二五年）

★図一一-二：藤原太一『図案化せる実用文字』（太鐙閣、一九二五年）より

●この人、自分で描いているんだよね？

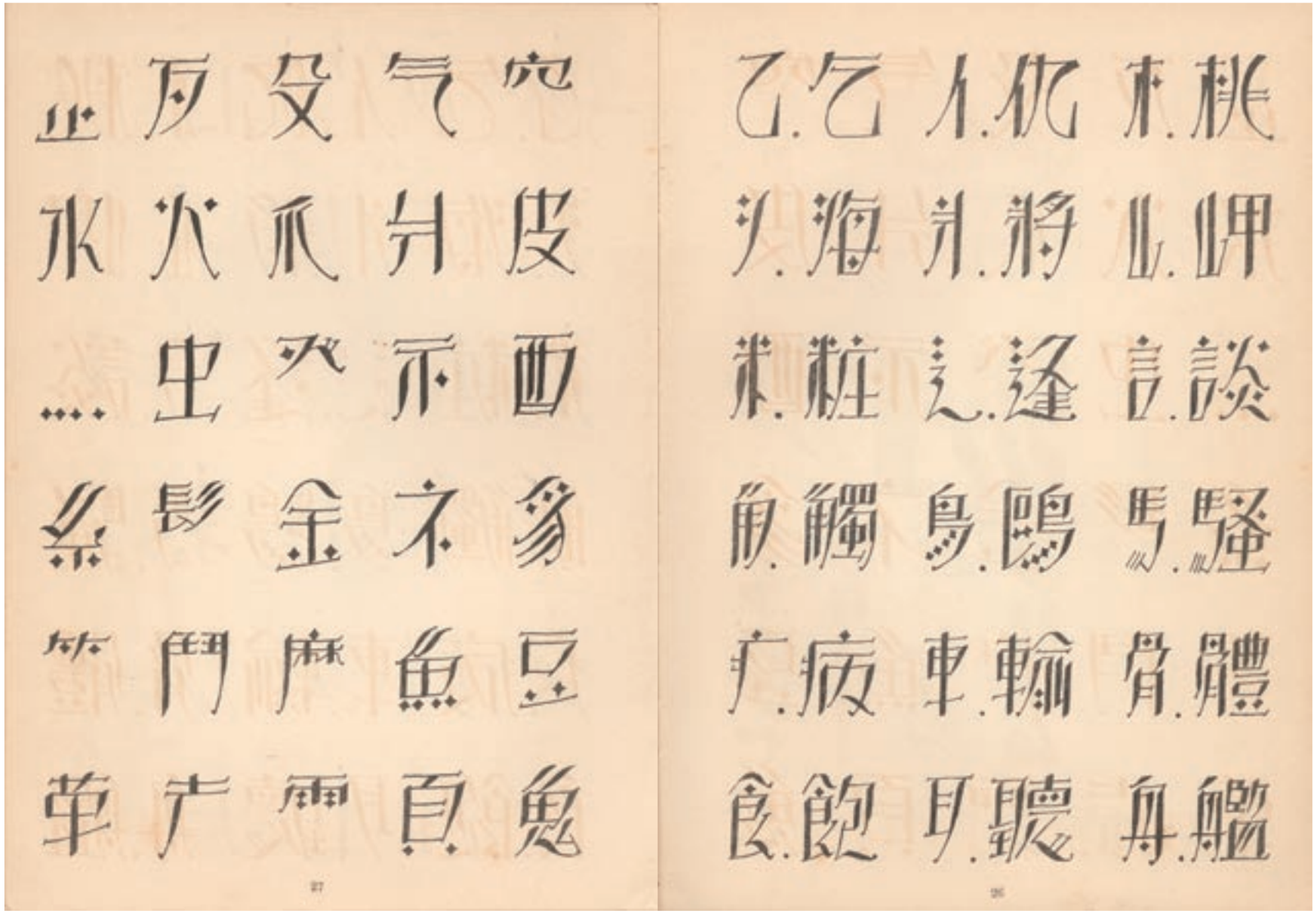
▲はい。当時の広告には、「独自の創造図案文字数千点に加ふるに既に他によつて造（つく）られた字体をも極めて広い範囲に亘（わた）つて取拾し、更に自家一流の描法を是れに施して自家函中の球を磨き上げてゐる」[☆註八]とありますから、文面どおりなら自作が中心で、他者のものを採録した場合も、独自のアレンジを加えたということです。

●非常にうまいよね。バランス感覚、デッサン力が優れているね。

▲藤原の描き文字からは、精度を高めようという意識が感じられます。それにくらべて矢島の『図案文字大観』は、数を揃えることに主眼があって、個々の形やフィニッシュは弱いかと……。

●そうだね、完成度は高いよね。これすごいね、一冊もらっていきたいぐらいだね。おっ、これは分合活字の発想じゃないの。「食」（しょくへん）だから右側に包を描けば、「飽」になる……分合描き文字！[★図一二]

☆註八…藤原太一『絵を配した図案文字』（太鐙閣、一九二六年）巻末の広告より。



★図一二…藤原太一『図案化せる実用文字』（太鐙閣、一九二五年）より

■この本も版を重ねたの？

▲かなり。描き文字集の特徴は、ものすごく版を重ねるんですよ。やはり便利な実用書だったんでしょうね。

●ここにあるビットマップ・スタイルの描き文字[図一三]は珍しいよね……これ、ほらさっきのラクダのモモヒキ体[図一四]ね。これはいろんな人の描き文字集に出てくるんだよね。

▲ラクダのモモヒキ体（笑）。

●足首がしまっている形、なんかあったかい味があって安心できる。

■楽だ体というか（笑）。

●ネタを明かすとね、この種の塗り残しね。これが意外と粋なものなんだよ。これをデジタルでやると一気にベタになっちゃうんだよね。むかし筆で描いていたときは、描いてる途中でいいなあと思いつつ、塗っちゃうんだ（笑）。止めるのは勇気がいるんだよね。

▲ラクダのモモヒキ体の影響で、これから平野さんの描き文字にも塗り残しが登場するとか（笑）。

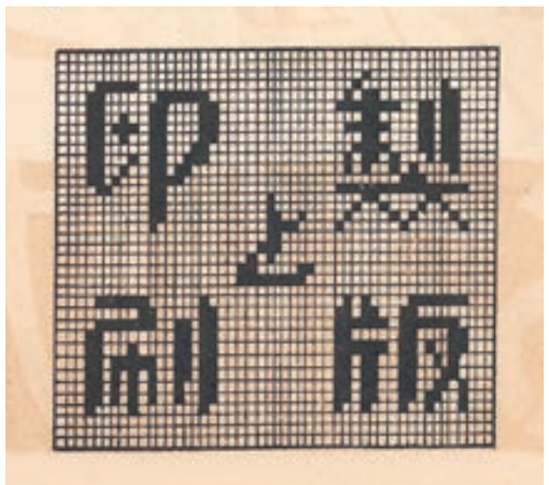
■編集者がなにか忘れてませんかと（笑）。

●ベジエでやるのはむずかしいんだよ。

この人、相当うまいですね。この《草笛》[図一五]なんかね。完全に〝描く〟だよね、絵だもんね。それと都市名を描いたのがあったね[図一六]。おもしろいね。すごいよ。でもここまでウソつけないよ。

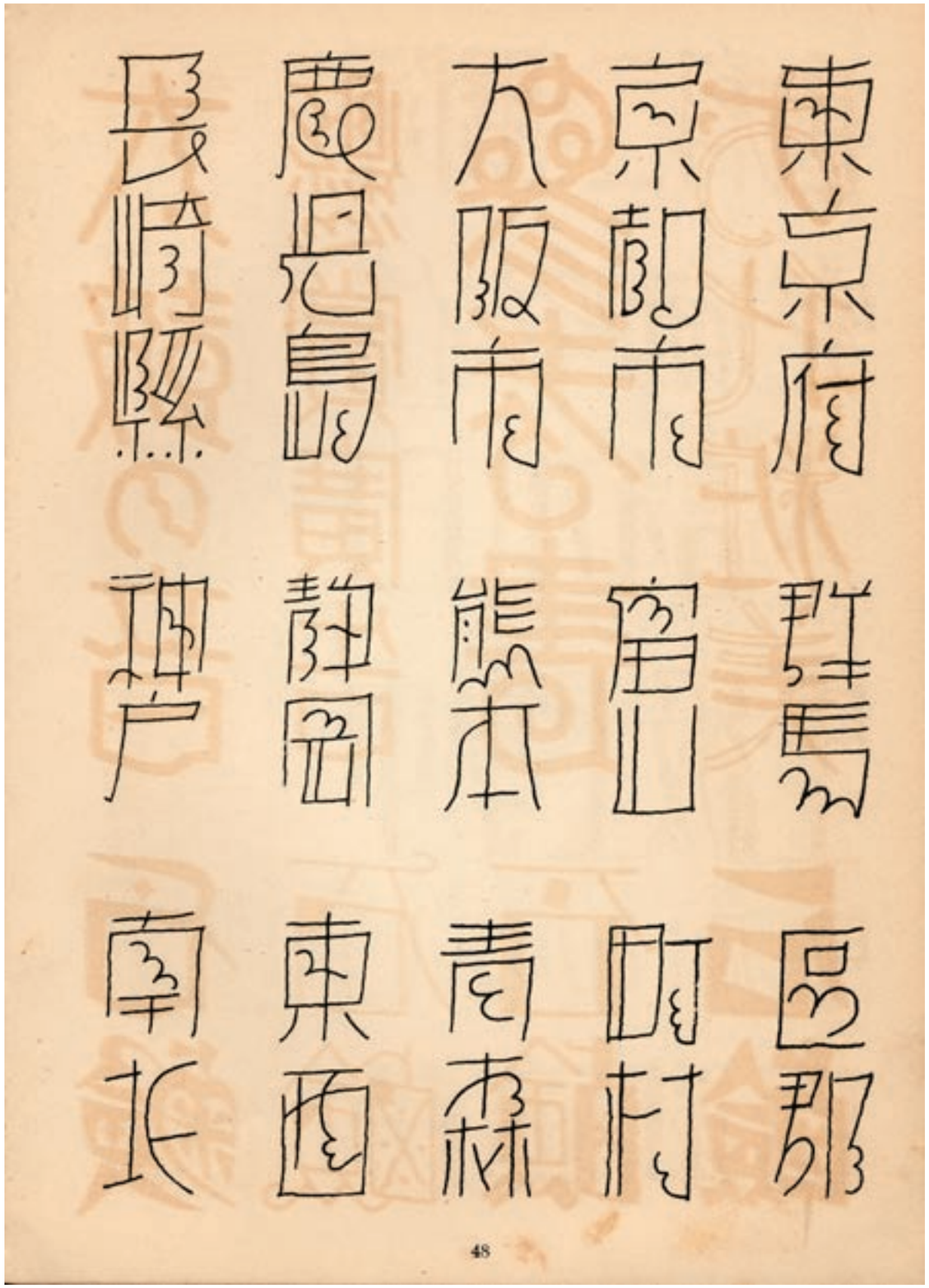
▲長崎の長という字、ここまで抽象化するのは勇気がいる？

●勇気がいるねえ。車窓から見た風景って感じがするよね。軽快だよね。これでちょっと太くしていけば、かなり違った雰囲気にもなっていくね。



★図一三…藤原太一『図案化せる実用文字』（太鐙閣、一九二五年）より

★図一四…ラクダのモモヒキ体（下・右から三行目「世界の山水」）、藤原太一『図案化せる実用文字』（太鐙閣、一九二五年）より



★図一六…藤原太一『図案化せる実用文字』（太鐙閣、一九二五年）より

★図一五…藤原太一『図案化せる実用文字』（太鐙閣、一九二五年）より